猪野夫人のポケット・カメラの購入行動

昭和51年11月のある日，猪野平太氏夫人の亜理子さんは自宅の居間でアルバムを広げていた。今，彼女は先月の旅行の写真をながめながら，楽しい旅行の出来事を一つ一つ思い起していた。彼女が撮影してきた写真には，美しい紅葉の信濃路の風景と，楽しげな友人達の笑顔が浮かび上っていた。

その時，突然，玄関のブザーが鳴って，隣家の秋元夫人の呼ぶ声が聞えた。秋元夫人は彼女より5才位若く，最近，小学校のPTAの役員になったばかりで，何かと猪野夫人に相談に来ていた。今日の用件も，12月に行なうPTAのバザーの件についてであった。猪野夫人は，長男が5年生の時から近くの小学校のPTAの副会長を4年間も続けていた。

用件を終えた時，秋元夫人は，居間のサイド・テーブルの上に置いてあるアルバムに気づいて，「あら，この間のご旅行のお写真を見ていらしたの。私にも見せて。」と語った。「ええ，どうぞ。」と言って，猪野夫人はアルバムを開いて見せた。「わぁきれい。きれいに撮れているわね。」「お天気でよかったわ。でも，初めてのカメラだったものだから，うまくとれなかったの。」「そんなことないわ。素晴しい写真じゃないこと，特にこれなんか。奥様，カメラをお買いになったの。」「ええ。」「私も一台欲しいなと思っているところなの。」「主人のカメラでは，大きくて重いでしょ。それに難しすぎるものだから，私，ポケット・カメラを買っちゃったの。」と猪野夫人は話した。

それから，猪野夫人は，秋元夫人にそのカメラを見せながら，どういう考えで，どのようにして彼女がそれを買ったのかを説明した。2人は時間の経つのも忘れて話し合っていた。

猪野家は，横浜市の郊外，田園都市線の沿線に住居を構えていた。今住んでいる家は，昨年の夏に，親の遺産と預金などを頭金に，銀行や会社から1千万円程を借りて購入した建売住宅であった。その前は，すぐ近くの公団の団地に7年間住んでいた。結婚してから団地を2転3転し，精一杯生活を切りつめて獲得したマイホームに猪野夫妻は満足していた。東京の都心にある会社まで自宅からの通勤時間は約1時間，ここは緑に囲まれた閑静な住宅地であった。

猪野平太氏は一流会社のベテラン課長で，入社後はほとんど営業畑を歩いていた。学生時代

このケースは，慶應義塾大学ビジネス・スクールの滝沢　茂教授が，ポケット・カメラのユーザーに関する調査と業界調査にもとづいて，クラス討議のために作成したものである。一部の固有名詞は変装されている。
〔昭和51年11月作成〕